

横山ゆずり作 「ああ 青春！」

(効果音) (終業のチャイム。クラスのガヤ)

男子1 麻紀、今日、帰りにさ、ゲームセンター寄ってかないか？ ほら、バス停の近くの先週新しくできたところ。新しい野球ゲームがすごく面白いんだってさ。

中原麻紀 ダーメ、残念だけど、今日も部活あるから。また今度ね。

男子1 あーあ、麻紀はいつも部活なんだから。ソフトボールの鬼だね、全く。

巻き そうよ。あたしは、ソフトやりに学校来てるようなもんだからね。

男子1 あきれた。自分で行ってるよ。その調子だと麻紀、甲子園も夢じゃないんじゃないか？

麻紀 バーカ。さ、行かなくちゃ。じゃあね。バーイ。

男子1 あ、麻紀！ ちえ、行っちゃったよ。

ナレーション お聴きのとおり、中原麻紀はソフトボールに夢中の青春高校2年生。中学のころから鍛えただけあって、ピッチャーで四番バッター。そしてキャプテンも務める腕前は、かなりのものでした。副キャプテンで親友の須田今日子とコンビを組んで、1か月後の秋の大会に備え、練習に余念がありません。

須田京子 (少し遠くから) あ、麻紀～。(駆け寄って) 麻紀、大変よ。

麻紀 どうしたの、京子。今、ちょうど部室行こうと思ってたんだ。何かあったの？

京子 それがね、1年生の子が3人、「やめたい」って言ってるの。

麻紀 やめる？ なんでよ？ 冗談じゃないわよ、こんな大事な時に。どこ？ 部室にいるのね。

(効果音) (バタバタ走っていき、部室の戸を開ける。)

女子1、2、3 (口々に)「あ、キャプテン」「麻紀先輩」「あの一、あたしたち…」

麻紀 大体の話は京子から聞いたわ。だけどあんたたち、やめるなんて、どういうつもり？ 秋の大会だって、あと1か月後じゃない。こんなときに3人も抜けられたんじゃ…。

京子 みんな、何かそれなりの訳があるんでしょ？

女子1(美由紀) あのと、あたし、うちの手伝いしなきゃいけないって、部活やってると遅くなるから。

女子2 うちの、親が「勉強に差し支えるからやめなさい」って。

女子3 あたし… ピアノやってて、音大に行きたいんです。それで、ソフトやってると突き指とかケガするから…。

麻紀 ちょっと、何よ。黙って聞いてりゃ、みんな自分勝手な理由じゃないか。そのために、他の部員がどれだけ迷惑すると思ってんの？ 大体ね…。

京子 (たしなめるように) 麻紀。(1年生に) そういうことなら仕方ないわ。無理に引き止めることできないから。それじゃ、もしできたら、また戻ってきてね。

女子 1、2、3 (口々に)すみません。

麻紀 ちょっと京子、そんな簡単に。

京子 だって、イヤなのを無理やり続けてもしょうがないでしょ。

麻紀 だからって、あんなにあっさり退部許しちゃうなんてさ。あんた、ちょっと甘いわよ。そんなんじゃ後輩にナメられたって知らないからね。

ナレーション …というわけで、新鋭の1年生に3人も抜けられたソフトボール部の態勢を立て直すべく、頭をひねる麻紀でした。

(音楽) (BGM。軽快な感じ)

麻紀 えーっと、ファーストが京子でしょ。セカンドが佑子。サードが1年のみどり、それで、っと…。

京子 ねえ、キャッチャーはどうするの？ 1年の美由紀ちゃん、やめちゃったから、真喜の剛速球受けられる子、いないじゃない。

麻紀 うん、それなんだよね、問題は。1年の敦代にやらせてみよっか。あの子なら、根性もあるし、あたしらが引退しても、うまくやってくれそうな気がする。あと1か月で、なんとかさ。

京子 1か月か…。かなり冒険だけど、やってみようか。

麻紀 よーし、それじゃ練習も、もっと締めていかなくちゃね。かわいそうだけど、敦代は特訓だね。それから朝連と日曜もやんなくちゃ。

京子 あ、あたし、日曜はパス、悪いけど。

麻紀 あ、そっか。京子は教会行ってんだっけ。じゃ日曜の朝は仕方ないね。でもさ、やっぱ京子は、クリスチャンだからかな、なんか博愛主義者って感じなんだよねえ。

京子 (笑って)何よ、急に。そんなことないわよ。

麻紀 だってさ、あたしみたく、後輩をどなりつけたりしないし。でもさ、京子、優しいのもいいけど、少しはにらみ聞かせないと、あいつら、ツケあがるよ。

京子 はいはい。それより麻紀、人の心配もいいけど、おうちのほう、どうなの？ お母さんは？

麻紀 うん。まあ、相変わらず。少しずつよくなって入るみたいだけど…。(FO)

ナレーション 麻紀の家は焦点でしたが、3か月ほど前、母親が過労で倒れて以来、家の中の仕事は麻紀の役目になっていました。

麻紀 でも、うちはさ、あたしの部活だけは好きにやらせてくれるから。だって、あたしからソフトボールを取ったら、何も残らないもんね。それに、なんだかんだ言ってたって、後輩たちもかわいいしさ。

(効果音) (グラウンドの練習風景)

麻紀 (捕球練習。ノック音「カキーン」)ほらほら、しっかり取って！(カキーン)もっと前に出なきゃダメだよー。目、開いてんの?!

(投球練習) 敦代、ほらもっと腰落として。あーダメダメ、逃げるバカないでしょ。もう一本行くよ〜。

川口敦代 (「バシ！」ミットに球を受ける) あ、痛！

麻紀 何やってんだー。球から目そらしちゃダメだって言ってんでしょ。

敦代 先輩。あたし、やっぱりできません。キャッチャーなんてムリです。麻紀先輩の球、すごいんですもん。

麻紀 大丈夫だって。それに今更キャッチャー代えるわけに行かないでしょ。グズグズ言わないの。

敦代 ……(ムツとしている)

(効果音) (練習続く)

麻紀 おーい、外野、ポケットしてんじゃないよ。しっかり取って！

(効果音) (「ピー」とホイッスル)

麻紀 集合！ (みんな、ドドッと集まる) みんな、なんだよ、今日の練習は。試合はあと2週間後だよ。少し気引き締めてやること。補欠から上がった3人、ミスが多すぎるよ。それから敦代、今日みたいじゃ、キャッチャー失格。居残り練習して。以上。じゃ、解散！

(効果音) (「お疲れ様」など、ガヤ)

女子1 ねえ、今日のキャプテン、ちょっとキツかったと思わない？

女子2 そうそう。あんなに名指しでビシビシ言うことないじゃん。ねえ？

ナレーション 秋の大会が近づくにつれて厳しくなる練習に、後輩たちは少々不満でした。部屋に戻ると、早速“井戸端会議”が始まります。まさか当の先輩たちの耳に入るとは思いもよらずに、オシャベリはエスカレートしていったのですが…。

麻紀 あれ？ 京子、部室、まだ電気ついてるね。

京子 ほんと。1年生、まだ残ってるのかな。もう7時過ぎじゃない…。

麻紀 (さえぎるように) シッ 京子、ちょっと黙って。

女子3 なんだって一番災難なのは、敦代だよ。ね。“黄金のバッテリー”かなんか知らないけどさ、勝手にキャプテンと組まされちゃって。

敦代 そうよ。大変なんだから。そりゃ、実力はあるかもしれないよ。だけども、あれじゃ、あたしら、やる気なくすよ。

女子2 いくら剛速球だって、あんなワンマンじゃ、部員をまとめる役目のキャプテンとしては、失格だよ。ねー？

(効果音) (「ガラ！」と戸が開く)

後輩たち あっ！

京子 残念だけど、聞かせてもらったわ。

女子3 す、すみません…。

京子 いいえ、この際、わたしもはっきり言うことにします。あなたたちは知らないだろ

うけど、麻紀はね…。

麻紀

京子、いいよ、もう。

京子

よかないわ。麻紀はね、“このソフトボール部が、今年こそ弱小チームの汚名を返上できるように”って、どれだけ部のこと考えてきたか。敦代をキャッチャーに抜てきしたのだって、見込みがあるから、敦代ならできるからって麻紀が…。キャプテンとして、チームのみんなを信頼してるからこそ、厳しくするんじゃない。それを何よ、あんたたちは！ 麻紀の家はね、今、お母さんが倒れて大変なのよ。でも、そんなところみんなに見せないで頑張ってるの。それを…。

麻紀

京子、もういいって。あたしも悪かったんだから。

京子

そういうね、キャプテンの気持ち踏みにじって、いい加減な練習したいんなら、あんたたちみんな、やめちゃいなさい！

ナレーション

日ごろおとなしくて控えめな京子の、思いがけない激しい怒りに、後輩たちはもちろん、当の麻紀も圧倒されたようでした。そんな事件のあった3日後――。

麻紀

京子、おはよう。

京子

あ、麻紀、おはよう。

麻紀

昨日の夕方さ、敦代たち、謝りに来たよ。バツの悪そうな顔してた。

京子

わたしもカッとなって、かなり言っちゃったから。

麻紀

ほんと。正直言って、あたし驚いたもん。まさか、京子があんなに怒るなんて思ってなかったんだ。悪いけど、京子ってさ、いかにもクリスチャンって言うか、聖人君子っぽくて、ただ優しいだけかと思ってた。だから、“後輩の前でいい顔して”、って思ってたこともあったんだ。でも、こないだの、あのド迫力だもんね。あたし、ほんと、感激しちゃったよ。

京子

やーね、からかわないでよ。クリスチャンだからって、何でも「うん、うん」って言うわけじゃないもん。でもわたしなんかね、やっぱり自分中心だから、何が本当に正しくて、何が間違ってるのか、よく分からないのね。カーッと来ちゃってから、“待てよ、これは自分の思いどおりにならないからじゃないかな”とか、“ここで本当に怒るべきなのかな”とかね。

麻紀

へえー、京子って、いちいちそんなこと考えてんの？ 疲れそう…。

京子

いつもってわけじゃないわよ。でも、例えば今度のことなんかね、“1年生が麻紀のこと誤解してるな”って少し前から気づいてたから、どうしたらいいのか、しばらく祈って考えてたの。

麻紀

祈る？

京子

うん。「神様、今、わたしはどうすべきでしょうか？」ってね。そしたら、あの事件でしょ？ あの時、わたし、「今言わなくちゃいけないよ」って、神様に言われたような気がしたの。

麻紀

へえー、あんたの神様って、そんな細かいことまで、いちいち聞いてくれるの？

京子 そうよ。わたし、なんでも祈っちゃうもん。
麻紀 ふーん。そももって、少なくとも今度のことは、あんたが祈って決めたとおりにして、正解だったわけだ。
ナレーション そうつぶやきながら、麻紀は京子の横顔を、思わずしげしげと見つめました。それは、不思議にまぶしくて、りりしい、“青春真っただ中”の顔でした——。

<完>